

的だが、それでは年末の株主総会に間に合わない。岩瀬さんは齋藤医師と相談し、喉頭摘出と同時にプロテーゼを装着してもらうことになった。

8月5日、喉頭の全摘手術を実施。さらに頸部リンパ節の郭清と甲状腺切除、プロテーゼの留置を行い、手術時間は13時間に及んだ。術後2週間は飲まず食わずの状態が続いたが、その後、流動食が食べられるようになり、9月4日に退院。1週間の自宅療養を経て仕事に復帰したのは、9月半ばのことだ。

シャントで声を取り戻し 株主総会を乗り切る

1カ月半ぶりの職場復帰だったが、IT技術のおかげで、浦島太郎にはならずすんだ。入院中もパソコンを病室に持ち込み、できる範囲で仕事を続けていたためだ。メールの送受信はもちろん、社内イントラネットにログインすれば、電子決済もできる仕組みになっている。岩瀬さんはベッドの上で、IT技術の進歩がもたらした恩恵をかみしめていた。

さらに、岩瀬さんの入院は、

思いがけない効果ももたらした。社長が不在という危機に直面して社員が奮起し、社内に自立の気風が広まったのだ。

「入院前は、何かにつけて「社長、どうしましょうか」と私に相談していた部下たちが、自分で判断してから相談に来るようになりました。仕事を任せたとで、部下たちもずいぶん成長したなあ、と感じましたね」

では、今の部下はどう感じていたのだろうか。岩瀬さんを支えてきた会社幹部の1人、花本明宏さんはこう振り返る。

「私たちには、社長が不在の間も、会社をしっかり守る責任があります。そこで、取締役が合



悠声会の皆と。悠声会では毎年1回、海外研修を行っている。今年は皆でバンコクに行った



バンコクのラティチャウティ-病院のドクターと看護師との交流

議制をしき、重要事項については、社長とメールで連絡を取り合いながら進めるようにしてい

ント法だった。

社長には、目標に向かって社員の心を1つにまとめるだけの強力なりーダーシップが求められる。ときには檄を飛ばし、ときには部下を励ましながら、社長は社員の士気を高めていかなければならない。その意味で、社長が声を失うことは、鳥が翼をもがれるようなものだった。シャント法は岩瀬さんにとって、まさに救いの神だったといっても過言ではない。

現在、岩瀬さんは「HME」と「フリーハンス」という2種類の人工鼻を使い分けている。人工鼻とは、のどに開けた永久気管孔をふさぐ器具のことだ。「HME」とは、上から指で押して気管孔を閉じ、発声するタイプ。一方、「フリーハンス」は自動で弁が開閉するため、発声のたびに指で押す必要がなく、一見、健常者とはほとんど見分けがつかない。

ました。ある程度こちらで筋道をつけてから社長に相談し、最終的なジャッジをいただくだけで済むように工夫したので、とくに支障はなかったですね」とはいえ、岩瀬さんの復帰に決定的な役割を果たしたのは、やはりシャ

岩瀬さんは株主総会ではフリーハンスを使用。スピーチもとどこおりなくこなし、株主総会を無事に終えることができた。復帰として初めて迎えた、株主総会という晴れの舞台。それ